
❖ 講演会・研究セミナー ❖

古典籍資料総合研究班 古典籍資料研究プロジェクト
「歌合の本質とその集積についての研究」

歌合断簡と残存

六百番歌合と歌学書—『顕昭陳状』を中心に—

2022 年 6 月 5 日(日) 14:00～17:00

オンライン開催 (Zoom)



安井 氏 (司会)

❖ 概 要 ❖

2022 年 6 月 5 日（日）、古典籍資料総合研究班主催の古典籍資料研究プロジェクト「歌合の本質とその集積についての研究」の一環として、日比野浩信氏（愛知淑徳大学非常勤講師）と鈴木徳男氏（相愛大学名誉教授）を講師に招き研究集会が開催された。日比野氏は「歌合断簡と残存」、鈴木氏は「六百番歌合と歌学書—『顕昭陳状』を中心に—」と題して研究報告を行った。安井重雄氏（龍谷大学文学部教授）の司会の下、両氏の報告に続き、参加者全員での討論が行われた。

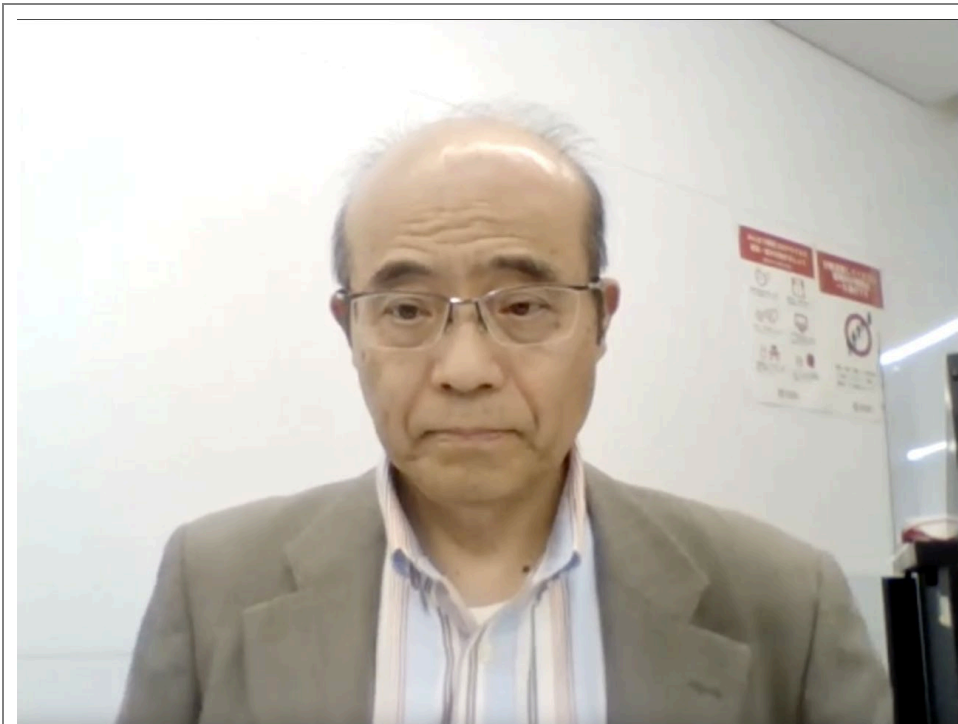
講 演 者： 日比野 浩信 氏（愛知淑徳大学 非常勤講師）



日比野氏は、綿密な調査を踏まえて、歌合の古筆切の残存状況を概観した上、その利用状況の特徴をまとめた。氏によると、歌合断簡の残存は古筆切に占める割合としては極めて少ない。平安時代の歌合は、ほぼ『十卷本類聚歌合』や『二十卷本類聚歌合』によって

伝播し、断簡として残るものはかなり限定的である。また歌合は、一部を除き、さほど広く享受されていたとは考えにくく、歌合集成・歌合部類の類は、選択されたものではなく、残存していたものである可能性がある。それに伴い、歌合の利用の幅も、必然的に限られたものとならざるを得ないという。次いで、『新宮撰歌合』の「伝素眼筆切」（個人蔵）や、『六百番歌合』の「伝後京極良経筆切」（個人蔵）や、『千五百番歌合』の「伝後小松院筆切」（個人蔵）など新出の断簡資料を紹介しつつ、それらの資料的価値および研究にもたらず広がりを見せた。最後に、『二十卷本類聚歌合 卷第二十 模写卷』（個人蔵）を取り上げて、模写資料の効用を提示した。

講演者：鈴木 徳男 氏（相愛大学 名誉教授）



鈴木 氏

鈴木氏は、顕昭が六百番歌合の俊成判に対する反駁、すなわち『顕昭陳状』を中心に、六百番歌合の歌学的側面について報告した。まず顕昭が『顕昭陳状』を著すに至るまで、六百番歌合はどのような場であったかを、主に規模や次第といった行事形態の面から確認した。次いで、「をろのはつをにかぐみかけ」「かひやがした」「そがぎく」のような、顕昭

が自詠に詠み込んだ難義語の具体例をめぐり、俊成判と比較しながら、六条家歌学に対する顕昭の姿勢を検証した。顕昭は『顕昭陳状』において、六条家歌学（藤原清輔説）を強く意識しており、時に従来の自説（『袖中抄』記載の説）を枉げても、御子左流の歌学に対抗する立場に立つという。最後に、以上の考察を踏まえて、『袖中抄』の成立と『顕昭陳状』との関係を考え、さらに、顕昭本『俊頼髓脳』の校合年月日の記述の背景を探った。すなわち、六百番歌合の俊成判詞を閲覧したことは、顕昭が『俊頼髓脳』を校合するきっかけになったのではないかという。